



2010年11月2日

【平田オリザ『森の奥』インタビュー】

< 1 -----

「今回のインタビューの上映は、『森の奥』の初見の観客に向けたものになりますので、初歩的な質問からなんですけれども、ロボットと俳優の会話が皆さんの一番気になるところだと思います。実際にセンサーで誰かが声を入れて会話をしていたりとか……どういう仕組みでされているのでしょうか？」

ロボットを動かすのは主に三つあって、センサーと、プログラミングと、遠隔操作ですね。プログラミングとセンサーだけでも理論的には出来るんですね。だけど、例えば演劇の場合に、ある相手役が話して、それにロボットが答えるようにプログラミングしといたとしても、客席でなにかし喋られたりしちゃうとそっちに反応したりするかも知れないでしょ。だからそれはできなくて……それも本当に理論的には声紋認識とかもあるから出来るんだけど、今のロボットはいっぺんに色んなことをやるのが苦手なんですね。

だから声紋認識をしつつセンサーで対応してしゃべるとかっていうと、計算する回数がものすごい増えちゃって、要するに乗数で増えていくから、二乗、三乗、四乗って増えていくでしょ。だから現実にはできないんですね。

そこで、ある会話のシークエンスを切り取って、そこのあるタイミングで遠隔操作でボタンを押すと一連の会話が続いて行って、その合間合間に人間が喋ってるんです。

「じゃあ、楽譜みたいなものですか。スタートするとそのまま止まらず人間が合わせてくれるという？」

ピアノの自動演奏みたいなものですね。

< 2 -----

「シーンの中でダウンしたり、センサーが不具合を……という時は、上演をストップさせる以外に何か方法はありますか？」

ロボットはね、いくつか想定されるアクシデントがあって、ただ、大体は大丈夫なんですね。

それでも後半、充電が……こんなに長時間使うように想定されて作られたロボットじゃないので、充電が保たなくなると電圧が低くなってきて誤作動が起きやすくなるんですね。

最後のシーンのぎりぎりが保つか保たないかで、フルスペックっていうか、持てるポテンシャルを全部引き出してやっているの、最後のシーンで出られなくなった場合には、代わりに全く別のシナリオにスイッチして人間が出てくるっていう風になってました。

一回だけそういうことがありました。カーテンコールだけ出られないとか、カーテンコールの途中で動きが止まっちゃってっていうのもありました。

さらにその前でなにか止まっちゃった場合には、いくつか用意してあって……本番ではなかったんだけど、演出助手が全部台本持って、演出助手が喋るといって、その場合には僕がまず出て行って謝る、っていうことも全部想定してて。謝って、ここから先は人間がやります、って。プログラミングされてたんですけど、それは使わなくてすみません。

「愛知の、お客さんに初めて見せたときは全てうまくいったと伺ったんですけども。」

そう、その前日に、演劇の「ゲネプロ」という完全に本番の通りやるものがあったんですけど、そこにはプレスがですね、僕が今までやった中でも一番ぐらいいきたんですよ。テレビカメラ10台ぐらい。スチールも20台ぐらい入って、そこでガンガンロボット止まって。これはダメかなと、前の日です。まあそこから根性見せましたね、ロボットが。

「それは具体的に充電の部分で補強するとか……」

色々、色々しました。補強は出来ないから、熱を持つのも誤作動の理由じゃないかっていうことで、まあ見て頂ければわかるんですけど、白衣着てるんですけど。白衣の後ろのところがうちのスタッフがね……そこらへんが演劇人の強い所なんですけど、すぐに100円ショップに行って、洗濯ネットを買ってきてね。洗濯ネット切って、背中は……あれ全部、熱を逃がすメッシュなんだよ。こちら辺が工学とアートの最大の美しいコラボレーションなんですよ。

「演劇の『制作』という部署こそが生きる場所ですね。」

そうそう。

「意外とアナログな手法も取り入れているんですね。」

意外とじゃない、もう全部アナログ。ほんとね、ロボットまだまだアナログですよ。

<3-----

「今回、『ボノボ』や『自閉症』といった専門用語に関して、専門書を必ず一冊お読みになってから脚本をお書きになると伺ったんですけども、この『森の奥』は人間だけの俳優で過去に作られたことがありますよね。そのときと比べて新しく追加されたというか、読まれたご本というのは……」

だいたいですね、台本書くのに二年ぐらいかけて、今回一年くらいですけど準備期間があって、その間に関連する書籍は全部読むんですね。だから今回も『森の奥』の前にロボット演劇の『働く私』ともう一つつくって、その二作作るためにロボット関係の本や映画は、少なくともメジャーなものは全部読みましたね。だから「鉄腕アトム」、「プルート」、アイザック・アシモフの小説もほぼ全部読んだんじゃないかな。だいたいね、一本の戯曲を書くのに100分のお芝居だったら50冊~100冊ぐらいは読むんですね。で、一つの本読んで、一個使えるエピソードが見つけれればラッキーっていう感じで……50冊っていうか、映画とかも入れてですね、50種類。でも今はインターネットでずいぶん検索しやすくなったんで、ずいぶん楽になりました。あまりそれに頼りすぎないようにするってことは大事ですね。

本を読むのは、ただ単に知識を得るだけじゃなくって……例えば科学者、猿の研究者、霊長類研究所の方が書いた本なんかは沢山読み込むんですけど、するとだんだん彼らの文体みたいなものが体の中にしみこんできて。

要するに彼らが喋りそうなことを書かなきゃいけないわけでしょ、劇作家っていうのはね。そこは小説家と違うところなので。彼らの文体に身をひたすってことは大事なんですね。そのために沢山読むんですね。

<4-----

「ロボットの名前が『タカハシイチロウ』と『ササキヨシエ』さんというので、私は観劇している最中にふき出してしまいました。鉄腕アトムとかロボットものでは『R2-D2』とか『ロビタ』とか、そういうイメージがあったので。何かそこに意図はあるのですか？」

最初ね、『働く私』のときね、アトムとウランにしようかと思ったんですけども、著作権にぎりぎりひっかかるかなとも思って、それでやめて、じゃあまあ普通の名前にしようということで。イチロウは野球のイチローを意識したんですけど……

でもね、これは面白くて、霊長類研究所でも日本人は名前をつけるんです。で、ヨーロッパは、今は名前つけるんですけど、昔はA-2号とかでした。

要するに、これが日本が霊長類研究が世界に先駆けて発達した一つの理由で、もちろん先進国の中で唯一日本は猿が居ますからね。猿のフィールド持ちやすいっていうこともあるんだけど、やっぱりでも伝統的に、日本人というのは猿とか、あるいはロボットもそうなんだけど、擬人化するのが好きなんですね。

これはやっぱりね、背景として宗教の問題があると思うんですよ。

キリスト教っていうのは人間だけが神に似せて作られた特別な存在っていうとらえかたですよ。

だから未だに進化論が受け入れられなかったりするでしょ。

日本人はさ、元々、例えば日本の昔話ってすごい猿が沢山でてくるでしょ。イソップって出てこないのね、狐はだましたりするけど。ものすごい近い存在だったわけですよ。

だから、進化論なんてそうじゃないの、って日本人だったら思うでしょ、猿が進化したんじゃないのって思うんだけど、ヨーロッパ人にとっては猿ってのはほんとに、南のジャングルの中で住んでる生物なんですね。

だからあんなものが進化して人間になったっていうのは受け入れがたいことなんですよ。

そういうことを理解してないと、政治学の世界で今のアメリカ政治のね、右寄りの人たちが何でああいうことを言い出すのかっていうことはなかなか、多分日本人には理解できない。

そうなのは全部繋がっているんで、そういう意味では非常に意識して名前をつけたってことはあります。

「じゃあ、調理場にはコンゴ人が居るということでしたが……調理場のロボットには、コンゴ人の名前がつくんでしょうか？」

いやいや、あれはね、別なんだな。

あれは、要するに非常に深い問題があって、元々がこの『森の奥』っていう作品はベルギーの国立劇場の依頼で書いた作品で、コンゴっていうのはベルギーの植民地だったわけですよ。

で、あそこの研究所でもね、猿と人間の違い、それから人間とロボットの違いについて話されてるんだけど、もう一つやっぱり人種差別の問題とか、植民地支配の問題っていうのがあって、あそこでもコンゴの人たちはいわゆる下級労働者というか、調理をする側、サーブする側としてあそこに雇われてるっていうもうひとつの問題が背景に実はあって……

そのことはもちろん今度の『森の奥』のテーマではないんですけども、やっぱり考えてもらいたい問題ではあったんですね。だから、ちょっとした台詞なんですけども、そういうのも入れているわけです。

そのことも含めて、お客さんには考えてもらいたいと思ってるんですね。

<5-----

「近日、石黒先生のアンドロイド（ヒューマノイド）を使った『さよなら』という演目があると伺いました。見には行けなかったんですけども、短期間、ほぼ一ヶ月ぐらいの差しかない期間にこの2つの演目が上演されたというのが気になったんですけども。」

あれはですね、ロボット演劇の『森の奥』をずっと阪大で稽古をしてたわけですよ、オレンジジョップっていう大阪大学の基礎工学部にある部屋で。

で、僕ずっと夏休み中、阪大の中に居て、でもずっと稽古してるわけじゃないんで、元々アンドロイドでも一本作って下さいって石黒先生から言われてたので、じゃあついでに作りましようかっていう感じで作ったんですよ。

そしたら、これはアンドロイド一人と人間、俳優一人の二人芝居ですけど、それ石黒さんに見せたら何かすごい気に入っちゃって、「森の奥」よりこっちのほうがいいって言い出してまた、、、何かね、研究者はね、すぐ新しいもの新しいもの、前へ前へ、ってもう、せつかく作ったんだからこっちまらずやろうよって思ってる間にね、ほんとにね、石黒さんっていうのはね、、、まず彼自身心がないって言うように、それをだって「森の奥」をやってる俳優の前でいうんだものそういうことを。ね、もう……すごいよね。

「すごいですね、ちょっと、想像はつきますけど。」

そうなの。僕はまあ、なんていうかな、とにかく作ろうってことで作ったんですけども、他の方にも見せたら「これ面白い」ってんで、急遽上演するってことになったんですね。

「どういったストーリーですか？」

これはね、アンドロイド、ジェミノイドっていうのは動けないんで。「動けないんでどうしようかなあ」と思って、これをお芝居にするっていても。それで、結局、死んでいく人にずっと詩を読み続けるロボットっていう設定にして、ただずっと詩を読んでいるだけなんですけどね。

時々会話が入るだけ、基本的に詩を読んでもらいます。15分のお芝居、もうインスタレーションの世界ですね。

来年、これはリンツのアルスエレクトロニカにもっていく予定なんですけどね。

まあ……ロボットにしるアンドロイド、ジェミノイドにしる、私からするとおもちゃを与えてもらっているんで、今のところはね、いくらでもできるんですよ要するに。ささっと。

例えば詩を読むだけのアンドロイドっていうのって、別に僕のものすごいクリエイティブな仕事をしているわけじゃなくて、ほとんどがその、谷川俊太郎先生の詩とか、ランボーとか色んな詩を読むんですけど、その組み合わせですから。

でもアーティストの仕事っていうのは、何ていうかな。こんなもんやれば誰でもできるじゃないかって、見たら思うんだけど、でも最初にやったやつが勝ちなんだよこの世界は。そういう意味ではもうロボットってまず素材が新しいから、いくらでも出来ますよ今の状態なら、作品はね。

「具体的にワカマルを使うときと異なった発想といますか、『動けない』っていうことも一つあると思うんですけども……」

動けないのと、逆に人間には近いんで……人間に近いっていうことをどういう風に使うかっていうことでしようね。

音声はそのまま人間がしゃべっているのを流しているわけですから。

ただね、あんまり意識はしてないですね。意識はしてないっていうか、僕たちは普段、劇作家はですね、ある俳優ごとに宛て書きっていうのをしているわけですから、基本的にやっている作業は同じです。このジェミノイド使ってお芝居するっていうだけのことなんで。

「制約がひとつそこできるといっただけ……」

そうそう、そんなに。太った俳優とか、すごい美人の俳優とかいるじゃないですか、それと同じ。

<6-----

「『森の奥』上演後の打ち上げの席で、俳優の方が、“演出方法が私たち俳優に対するのとロボットに対するのと全く同じだった”ってことで、ショックを受けたと仰ったんです。でも実際はいま平田先生がおっしゃったように素材として使っているだけで、ロボットが演劇に最適で、ロボットだけでいつか演劇を構成したいという願望にあるわけではない、と思うのですが、いかがですか？」

俳優ってというのはね。とにかく嫉妬するんです。

もう、『私が私が！』っていう人が俳優になるから、ロボットの方に演出家の関心が行ったらそれでもう嫉妬するんです。そういう特殊な生き物だからね。俳優の方がよっぽど特殊だよ、ロボットよりも。

「そうかもしれないです。では、ロボットだけで演劇を作るという事自体はありえないですか？」

それはもちろん可能性としてはあるでしょうね。それはもちろんあるけど、それはそういうストーリーを考え付いたらそうするんじゃないですか。

「それを最終目的としておられるわけではないんですね。」

それはそうなんです。

ただね、僕はいま石黒先生とチームを組んで、基本的には石黒先生が喜んでくれればわたしは嬉しいので、だからそういう注文がきたらそういうものを作るかもしれないですね。

ただ、そのときにまた考えますね。それは、どういう想定にしたらそれが無理なのか、できるか、を考えるのが僕の仕事ですから。そういうことも勿論あると思いますね。

(2010/11/02 @Osaka University)